

パリの大学図書館を利用して

松崎 晋

私が、文部省在外研究員として、パリへ向かったのは一昨年12月初めのことで、昨年10月初めに帰国するまで、10カ月間のパリ滞在でした。私が、滞在したのは、パリ第7大学、固体物理グループのM. ショット教授の研究室で、電導性ポリマーの物性について研究するのが目的でした。パリの大学制度は、1960年代の大学紛争に端を発する大学改革によって、それまでの名称が変更され、第1から第13までのナンバーで呼ばれるようになっていきます。たとえば、文科系の大学として有名なソルボンヌ大学は、パリ第3大学と呼ばれています。私が滞在した第7大学は理科系の大学で、同じ敷地内にもう1つの理科系大学である第6大学と同居していますが、中には2つの大学が同居している建物さえあって、私にとっては、ちょっとめずらしい建物構成でした。

私は、研究のためにおもに2つの図書館（あるいは図書室）を利用していたので、そのとき感じた印象を書いてみたいと思います。その1つは、固体物理グループの専用図書室で、もう1つは化学系の研究用図書館です。私の専門は物理化学、つまり物理と化学の境界領域で、両分野の雑誌や単行本を参考にする必要があります。固体物理グループの図書室は、ちょうど熊本大学の理学部物理学科の図書室と同じくらいの規模であり、物理関係の雑誌と単行本を中心にそろえてあって、おもにグループ内部の研究者と学生が利用しています。化学系の研究用図書館は、第6大学と第7大学の両方の研究者と学生がおもに利用するための化学系総合研究図書館ですが、他の大学からも多くの利用者が来ているようです。ここには、約200種の化学系雑誌と7000冊以上の単行本をそろえてあり、フランスでもっとも充実した化学系図書館だということでした。私が必要とする化学系の雑誌はほとんどそろっていたので、この図書館は非常に利用価値が高いものでした。また、研究専用の図書館であるため、学部学生が試験準備のために使うようなこともなく、静かな環境で、調べ物に専念できるのがありがたいところでした。書架はすべてオープン式で、利用者は自由に見ることができて、単行本は3週間まで借り出すことができます。雑誌や叢書類は貸し出し禁止で、このへんのシステムは

日本の大学図書館と変わらないといえます。夜間も8時ぐらいまで開いていて、学生アルバイトが係りとして働いていました。

熊本大学の図書館と比べてもっとも違いを感じたのは、文献をコピーするときの便利さです。熊本大学においては、とくに校費でコピーするとき、いちいち申込書を書かなければならないので、面倒くさいと感じることがあります。パリ大学の図書館はすべてプリペイドカード方式になっていて、あらかじめテレホンカードのようなものを買っておけば、あとはそのカードを機械に入れるだけで自由にコピーできて、非常に便利でした。校費の場合も、研究室であらかじめカードを購入してあるので、なんの面倒もないのです。価格的にも、コピー枚数100枚用のカードの値段が70フラン（約1400円）ですから、1枚あたり14円ぐらいで、日本と変わりません。この方式は、熊本大学でも取り入れるべきだと思いました。ただ初めてコピーしたときにおもしろいと思ったのは、機械が全部日本製だったことです。図書館員の話では、日本製がもっとも優秀だということで、ちょっと鼻が高かったのですが、私が「日本の大学ではゼロックスをおもに使っている」というと、不思議そうな顔をしていました。

もう1つ便利だと思ったのは、パソコンを使った文献の検索システムで、フランスじゅうの大学図書館の文献を調べることができます。必要ならばコピーもパソコンを通じて依頼することができて、2～3日で届けられるのです。同様なシステムは日本でも普及していますが、まだ手続きの上で手間がかかるようで、より簡便なアクセスの方法を考えると、思います。ほかの国のシステムを参考にして、自分の国のシステムを改良するというのは、今さかんにいわれている国際化の1つでしょう。ぜひ、学生や職員がより便利に利用できる図書館にしていきたいと思います。

（まつざき すすむ 理学部助教授 化学）